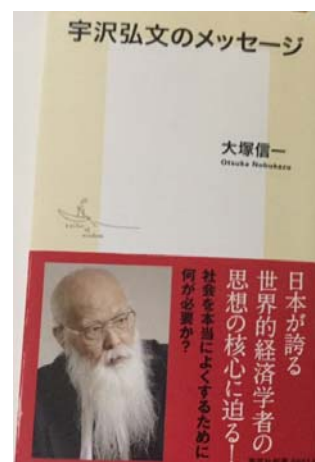


## 宇沢弘文のメッセージ

表題は大塚信一さん執筆の集英社新書、2015年9月のタイトルである。表紙カバー裏から — 宇沢は走り続けた。走りながら考えた。社会を本当によくするためには何が必要か—。ノーベル経済学賞にもっとも近いと評された宇沢は、その評価を自ら否定する形で自動車の社会的費用、成田闘争、地球温暖化、教育問題等々、20世紀後半に日本社会が直面していた困難な課題に立ち向かっていった。本書では、宇沢理論とマルクス経済学との関係を始め、これまで語られることのなかった側面にも言及。およそ30年間、宇沢の仕事に伴走してきた岩波書店の名編集者が、“人間が真に豊かに生きる条件”を求め続けた天才経済学者の魂のメッセージに肉薄！する 初の宇沢思想入門。



本書は次の8章から構成される。序 数学から経済学へ 1 アメリカでの活躍とベトナム戦争の影 2 自動車の社会的費用 3 近代経済学の再検討—宇沢思想の発端 4 「豊かな国」の貧しさ 5 「成田」問題とはなにか 6 地球温暖化に抗して 7 著作集の刊行、そして教育問題への提言 終 社会的共通資本という思想

宇沢先生は2014年9月18日、86歳の生涯を終えた。昨年10月16日にレポートで「追悼 宇沢弘文先生」を書いた。『自動車の社会的費用』など、いくつかレポートしてきた。本書は30年以上にわたり宇沢先生と親しく交流し、先生の多くの著書を編集、出版してきた編集者だけあり、じつに分かりやすく書かれている。コンパクトながら、深みのある新書である。あとがきで「本書の内容について一つ心配なことがある。それは、原田正純さんが“やさしくなくては学者でない”ということ宇沢弘文先生は私に身をもって教えて下さった”と書いていることと関係するのだが、宇沢先生の真の優しさを私はどこまで描けているかということだ。読者のご批判を待ちたい」と。本書を一読して、宇沢先生の間味と真の優しさをしっかりと感じとることができた。

ここでは、宇沢先生の教育に対する言葉だけを紹介しておきたい。教育が「個別的な家庭あるいは、狭く地域的ないしは階級的に限定された場ではなく、できるだけ広く、多様な社会的、経済的、文化的背景をもった数多くの子供たちが一緒に学び、遊ぶことができるような場でおこなわれることが望ましい」。学校教育制度は、このような教育の理念から必然的に導きだされたものである。

(2015年12月16日)